

令和 6 年 6 月 20 日現在

機関番号：32506

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00582

研究課題名（和文）ガイ語の焦点表示と情報構造

研究課題名（英文）Focus marking and information structure in G|ui

研究代表者

大野 仁美（Ono, Hitomi）

麗澤大学・外国語学部・教授

研究者番号：70245273

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、カラハリ・コエ語派に属するガイ語およびガナ語の談話における情報構造を解明することを目的とした。COVID-19の影響で現地調査が一時中断されたが、オンラインでの調査や過去の資料のデジタル化を通じて研究を継続した。最終年度には現地調査を再開し、新たなデータの収集と分析を行った。これにより、これらの言語における焦点表示、語順、談話構造の新たな知見を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、カラハリ・コエ語派の言語学的特徴に関する新たな知見を提供する点にある。特に、焦点表示や語順、談話構造の分析を通じて、これらの言語の情報構造に関する理解が深まった。また、これらの知見は、普遍的な言語理論の構築にも寄与するものである。社会的意義としては、言語資料のデジタル化とアーカイブの整備を通じて、文化遺産の保存と伝承に貢献することが挙げられる。これにより、現地コミュニティの文化的アイデンティティの維持・強化が期待される。

研究成果の概要（英文）：This research aimed to elucidate the information structures and focus markings of G|ui and G|ana, languages belonging to the Kalahari-Khoe language family. Although fieldwork was temporarily halted due to COVID-19, the research continued through online interviews and the digitization of recorded old materials. In the final year, fieldwork was resumed, and new data were collected and analyzed. This resulted in new insights into focus marking, word order, and discourse structures in these language.

研究分野：言語学

キーワード：談話文法

## 1. 研究開始当初の背景

情報構造の研究分野において、焦点および焦点に関わる現象についての通言語的な知見は近年顕著に拡大されてきた。アフリカにおける少数派の言語群であるコイサン諸語コエ語族においても未記述であった個別の言語の現象の報告が蓄積されてきた。その結果、グイ語においては、他のコエ語と異なり、語順・外置・焦点表示という3つの現象が関わっていることが明らかになりつつあったが、この3つの現象がどのように機能分担し、相互作用しているかは解明されていなかった。またそれを可能にするには、関連する情報構造的現象を最大限に観察できる質量ともに十分な談話資料の収集が必要であったが、どのようにして必要な使用例を網羅できるような手法を開拓するかが課題であった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、グイ語の情報構造の体系を、焦点関連表現、特に「旧情報の焦点化に関与する」と考えられる焦点表示 *ki* に注目し、総合的・網羅的に高い精度で詳細な記述を完成することである。これまで単文を主な対象として考察されてきた情報構造の現象を、談話の範囲に拡大し、言語学的に妥当で精緻な記述に基づく考察によって、情報構造の通言語的枠組みにグイ語を位置付けることである。

同時に、このような研究を可能にするためには、*ki* を含む複数の情報構造に関連するマーカーの使用例を十全にとらえた談話資料が必要である。この研究では、収集する談話のジャンルを多様化・拡大化し、談話テキストコーパスを構築する。そのために採用するテキスト収集の新しい手法「物語作成協働タスク」の有効性も検証する。

## 3. 研究の方法

本研究は、「談話資料の収集 データ化 分析(資料の追加)」という3つのステップを循環的・累積的に進めていくという方法で進める。まず、現地調査を通じて一次資料を収集するが、その際にこれまで記録できていなかった母語話者どうしの自然会話、特に話者間のインタラクションや思考のプロセスが表出されたテキストを収集することを目指して「物語作成協働タスク」を利用し、グイ語およびガナ語の話者による談話資料を録音・録画した。COVID-19の感染拡大により現地調査を中断せざるを得なかった期間には、既存の資料のデジタル化を進めた。

次に、収集したデータの電子化とアノテーションを行い、分析用のコーパスを構築する。これには、praat や ELAN といった言語学的解析ツールを用いて、データのトランスクリプション・アノテーション・タグ付けを行った。そしてこれらのデータを用いて、情報構造に関わると思われる要素の出現と語順の分析を行った。これらの出現は談話の構造下でのものであるため、必然的に談話の分析も同時に進めることになった。また、現地調査の中断を補うために当初は予定していなかった既存の古い録音資料や(これまで未調査の)ガナ語ギョム方言資料を対象に加えたことにより、文法現象の通時的な変遷や近隣の言語間での対照研究も進めた。

## 4. 研究成果

### (1) 焦点化に関する項目

当初調査項目としていた3項目について、以下の結果を得た：まず、当初の外置要素と共起してその焦点化とかがかかっていると考えていた同定詞 $\gamma_a$  は、その出現位置を精査することにより、 $\gamma_a$  でマークされる節が談話の主たるストーリーラインを構成する節構造から外に出ていることを明らかにすることができた。次に、焦点表示 *ki* については、当初の予想通り、情報焦点や対比焦点には関与せず、排他焦点・旧情報の焦点化・旧情報の detopicalization にかかっていることを確認することができた。最後に、語順については、単文と異なり、談話構造の中に含まれる連結した節には語順において制限があるため、バリエーションはみられないことが明らかになった。そのため、情報構造に果たしている役割はかなり小さいという結論に達した。これらはいずれも、情報構造に対して持っていた関心をグイ語の談話構造の分析へとさらに展開させるものであり、後続する研究テーマにつながった。

### (2) 談話における現象

談話資料を扱った結果、いくつかの知見を新たに得た。主なものとして、これまでグイ語研究において検討されたことのなかった間接話法の存在および間接話法を導く complementizer の存在を確認したことが挙げられる。古い記録も考察対象に入れたことから、30年にわたるグイ語のデータを俯瞰することが可能になり、この近隣のバントゥー語から借用された complementizer が若い世代に急速に広がっていることが確認できた。この要素と入れ替わりに消えつつあるものは modal な要素であることも明らかになった。これまでほとんど知られていなかった統語論上の通時的变化について重要な知見を得ることができたのと同時に、これまで

収集したテキストでは十分に集めることができていなかった *irrealis mood* の実例を大量に捕捉することができ、これらの文法現象についての理解を飛躍的に深めることができた。

### (3) ガナ語ギョム方言への調査対象の拡大

当初予定していた研究対象であるガナ語は、グイ語とコミュニティーを共有しており、相互に意思疎通が容易であると研究者がみなしてきたものであった。今回 COVID-19 のために現地調査ができなくなった期間に、オンラインを通じてガナ語ギョム方言の調査を開始することができた。調査を開始すると、この変種がグイ語とかなり異なる、いわば「グイ化していない」変種であり、情報構造に関わるものも含め主な文法項目もグイ語とは共有されていないものが多く、一方でグイ語には見られない他のコエ語との共通点を有していることがわかった。本研究が終了した時点では、基本的な文法項目の調査を終了した段階だが、収集した談話資料の分析へと今後展開していく予定である。

### (4) 学術的および社会的意義

本研究の成果は、言語学と文化人類学の両分野において重要な意義を持つ。言語学においては、グイ語およびガナ語の詳細な言語構造の解明により、普遍的な言語理論の構築に寄与する点が挙げられる。特に、グイ語で観察される情報構造の談話への組み込み方・談話を制御するシステムの解明・シンタクスの通時的变化等は、言語学の理論的枠組みの構築に貢献するものである。本研究によって収集しトランスクリプトした資料のうち、特に民話(のバリエーション)と話者の個人的な経験を語ったものについては、文化人類学的にも貴重な資料である：これまでもグイ語のテキスト資料は文化人類学者によって蓄積され分析されてきたが、この研究の実施によって、ようやくテキストの隅々まで言語学的に解明できる段階に達することが可能になったからである。同時に、これらの資料は、研究資料としてだけでなく、現地の文化と経験を記録し保存するための重要なリソースでもある。現地コミュニティにとっても貴重な記録であり、自身の文化遺産の保存と伝承に貢献するものであるため、コミュニティと協力してすでに共有を開始している。例えば、収集した音声資料やビデオ資料を教育用の資源として加工し、現地の学校やコミュニティセンターが自由に利用できるようにすることを計画している。このようにして、若い世代に対して伝統的な言語と文化の重要性を伝えることに大きく貢献することができる。

### (5) 今後の展望

本研究で収集したデータと得られた知見を基に、今後は対象をグイ語・ガナ語の談話構造の分析へと進め、両言語の変異の観察記述を行い、他のカラハリ・コエ語派の言語との比較研究を進める。これによってより広範な言語類型論的な知見を得ることに貢献できると考える。同時に本研究によって蓄積したグイ語・ガナ語の談話資料は、若い話し手の言語運用能力が急激に失われつつある当該コミュニティにとって貴重な言語文化遺産であり、これを次世代に引き継ぐための具体的な手立ての模索をすでに開始している。今後も、収集した資料を活用した文化保存活動を継続的なものにするために、現地のコミュニティ・教育機関・文化団体と協力して、伝統的な言語と文化の保存と伝承に向けたワークショップやセミナーを開催する。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計16件（うち査読付論文 12件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 15件）

1. 著者名 セケレ ハケドゥメレ、加藤 幹治、大野 仁美、中川裕	4. 巻 28
2. 論文標題 ガナ語資料：モダリティ	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 1~11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/0002000407	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 セケレ ハケドゥメレ、木村 公彦、大野 仁美、中川裕	4. 巻 28
2. 論文標題 ガナ語資料：他動性	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 1~13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/0002000408	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Nakagawa, Hiroshi, Alena Witzlack-Makarevich, Daniel Auer, Anne-Maria Fehn, Linda Gerlach Ammann, Tom Gueldemann, Sylvanus Job, Florian Lionnet, Christfried Naumann, Hitomi Ono, Lee J. Pratchett	4. 巻 -
2. 論文標題 Towards a phonological typology of the Kalahari Basin Area languages.	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Linguistic Typology	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1515/LINGTY-2022-0047	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する

1. 著者名 ONO, Hitomi	4. 巻 16
2. 論文標題 A Gui 'Family Problems' narrative text.	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Asian and African Languages and Linguistics	6. 最初と最後の頁 61-87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15026/117157	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野仁美, 河内一博, 中川裕, 米田信子, 亀井伸孝, 森壮也, 宮本律子	4. 巻 100
2. 論文標題 新しいアフリカ言語研究	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 67-72
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加藤幹治・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：受動表現	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 335-341
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤幹治・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：アスペクト	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 343-352
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤幹治・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：モダリティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 353-360
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 加藤幹治・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：ヴォイスとその周辺	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 361-369
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村公彦・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：所有・存在表現	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 371-388
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村公彦・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：他動性	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 389-398
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村公彦・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：[連用修飾的]複文	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 399-407
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 木村公彦・大野仁美・中川裕	4. 巻 25
2. 論文標題 グイ語資料：情報表示の諸要素	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 語学研究所論集	6. 最初と最後の頁 409-417
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野仁美	4. 巻 18
2. 論文標題 「グイ語における姿勢動詞の文法化」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 『言語と文明』	6. 最初と最後の頁 105-114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野仁美・中川裕	4. 巻 23
2. 論文標題 「グイ語資料：「否定、形容詞と連体修飾複文」」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『語学研究所論集』東京外国語大学.	6. 最初と最後の頁 267-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 大野仁美	4. 巻 16
2. 論文標題 グイ語の語順とWh疑問文	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 言語と文明	6. 最初と最後の頁 97-105
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 中川裕、大野 仁美、ビヘラ セケレ、ハケドゥメレ セケレ
2. 発表標題 グイ・ガナ正書法の遠隔訓練
3. 学会等名 アフリカ学会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 ONO, Hitomi
2. 発表標題 Direct and indirect speech in G ui.
3. 学会等名 The Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) Capstone Workshop
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Lee Pratchett, Alena Witzlack-Makarevich, Linda Ammann, Daniel Auer, Anne-Maria Fehn, Tom Guedemann, Sylvanus Job, Florian Lionnet, Christfried Naumann, Hitomi Ono, Hirosi Nakagawa.
2. 発表標題 Typological features of Consonants in Khoisan languages of the Kalahari Basin Area.
3. 学会等名 Francqui International Professorship Symposium: The Diversity and Documentation of Speech Sounds in Languages of theWorld. (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Nicholas Evans, Wayan Arka, Danielle Barth, Henrik Bergqvist, Christian Doehler, Sonja Gipper, Dolgor Guntsetseg, Yukinori Kimoto, Dominique Knuchel, Hitomi Ono, Eka Pratiwi, Saskia van Putten, Alan Rumsey, Andrea Schalley, Stefan Schnell, Asako Shiohara, Elena Skribnik, Yanti
2. 発表標題 How universal is complementation? And does corpus type influence our answer?
3. 学会等名 Naturally occurring data in and beyond linguistic typology. (国際学会)
4. 発表年 2023年



1. 発表者名 大野仁美, 加藤幹治
2. 発表標題 ガイ語の話法における人称シフト
3. 学会等名 日本アフリカ学会第58回学術大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 大野仁美
2. 発表標題 ガイ語のreported speech
3. 学会等名 AA研共同利用・共同研究課題「The Social Cognition Parallax Interview Corpus (SCOPIC) に基づく社会認識の言語標示に関する研究」 2021年度第3回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 大野仁美
2. 発表標題 物語作成法は文法調査に有効か
3. 学会等名 日本アフリカ学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 大野仁美
2. 発表標題 ガイ語のコピュラ文.
3. 学会等名 日本アフリカ学第56回学術大会. 於: 京都精華大学, 京都. 2019・05・19.
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 ONO, Hitomi
2. 発表標題 Focus marking and identification in G ui.
3. 学会等名 WOCAL 9, Mohammed V University, Rabat. (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大野仁美
2. 発表標題 カラハリ・コエ語派における姿勢動詞の文法化
3. 学会等名 日本アフリカ学会大55回学術大会、北海道大学.
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 ONO, Hitomi
2. 発表標題 Is ki a focus marker in G ui?
3. 学会等名 Seminar, Department of African Language and Literature, University of Botswana.
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------